

しんきよくたかおさんげ

新曲高尾懺悔（しんきよくたかおさんげ）

へひとたび清容を見て そもんに叶い またある時は声を聞き 愛執の心いと深し へそつと素顔の流し目に 馴れし廓の八文字 へ松の位に柳の姿梅が香とめし 後朝も へまだ覚めやらぬぬくめ鳥 雪の明日の白無垢は消ゆる思いとなぞかけし へ心の丈をいうならく 奈落の底に入る時はえんぶの昔なつかしく これまで現れさむろうなり

高尾へ申し／＼ご出家様

道哲へハテ 合点の行かぬ 誰じゃ／＼

高尾へここじゃわいな

道哲へヤヤ そなたは三浦の

高尾へアイ 高尾じゃわいな

道哲へ南無阿弥陀佛 南無阿弥陀佛／＼／＼

高尾へ六道四生の巷に迷い 浮みもならぬ我身の上

頼兼様が 懐かしいわいな

道哲へ嗚呼 不憫やな 喜怒哀楽は人情の常 勤めのうちの憂さ辛さを

何んと話して聞かせまいか

高尾へサア 私もお話申したく 是まで参りましたわいな

道哲へサ その話は

高尾へアイ それは

へ恥ずかしながら川竹の 憂きふし繁き中々に へ年があいての楽しみは やがておの字の名を嗣いで 二日酔いせぬ身とならば 素足も野暮な足袋になり つめるを常のこの指に 糸針もちて物縫いならい 肌着仕立てて着せてみて へ殿御のたけに 真実が 届かばほんに嬉しかる そうしてこうしてどうしてと 侷になる身か何ぞのように へ別れの淵のうたかたも 哀れはかなき身の上と へ涙は袖にまきの葉の 露重げなる風情なり

道哲へ南無阿弥陀佛 南無阿弥陀佛／＼

とてももの事に懺悔には重罪も滅すると言えば

ありし廓の事どもを愚僧に話し召されぬか

高尾へさなきだに女は五障三従の重き罪 それさえあるに小夜衣

我夫ならぬ重ね襦 偽り飾りし身の罪を そんならお話申し

ましようか

道哲へ罪障消滅のため詳しく話して聞かせ候え

南無阿弥陀佛 南無阿弥陀佛

へ懺悔に罪も消えぬべし 懺悔に罪も消えなんと 露のこの身を草枕 へ夜
毎夜ごとにかわりゆく 昨日の逢瀬今日の淵 濡れて寝る夜のささごことに
へ笑うてつらき日もあらば へ泣いて嬉しき夜半もあり へ蚊帳よりそと
に紙一重 まかせぬ身とて胸の苦を へ言うにいわれざぐるぐる巻きの
それその文の数 届いて明日の仲の町 客を待つ虫 あきつ虫 へ主を待つ
夜は人こそ知らね 夜着を枕に鈴虫なれや へ我も虫には あらねども

へ殿御恋しと草葉にすたく へ憐れとも ふびんとも 言うべき人は面影も
見えずみえずみ箒木の

へ無残や高尾は世の人の思いを賭けし報いにて 罪障の雲たち覆い めい
く へもうくろうくたり 修羅の太鼓のうつつなく 早 時来ぬと夕ま
ぐれ へこは口惜しや 浅間しやと立退けば 又 行先に炎々と へ焰に苦し
む身の劫苦 獄卒 悪鬼の苔に打たれ 山に登れば 剣に貫き 谷に沈めば
紅蓮の氷に 白無垢かえて唐紅 血は瀧つ瀬や酒の波 嘘の涙は焦熱地獄
仇に誓いし 誓紙の鳥 くるがねの はしを鳴らし 両眼めがけ飛びかかる
へ追えどはらえど立ち去らず ふるい戦慄き たじくく 追い巡りて
くるくく 苦しき思いに 魂きわる へ道哲ここぞと 念珠をもみ南無
廣大観世音御あみりたていぜいきやらうんそわかと 朝日の弥陀を唱うれ
ば へ野分け夜嵐目前に たちまち紫雲あいたいし 花ふりかかる 法の庭
紅葉の塚と夕映えも 代々にその名や残るらん。